新型コロナ　室内が湿度 40～60%だと感染者や死者が減る？

2022 年 12 月 8 日毎日新聞

室内の空気が乾燥し過ぎても、逆に湿度が高過ぎても、新型コロナウイルスの感染率や、感染後の重症化および死亡のリスクが増大する可能性がある。室内の相対湿度を 40～60%に保つと、新型コロナの感染率と死亡率が下がる。米マサチューセッツ工科大学（MIT）でハーバード・MIT 健康科学・技術プログラムに参加する Connor Verheyen 氏らが、こんな研究結果を発表した。Verheyen 氏は「中間的な相対湿度には、（新型コロナから）身を守る潜在的な効果がある」と述べている。論文は「Journal of the Royal Society Interface」に 11 月 16 日に掲載された。

研究グループによると、多くの人が快適と感じる相対湿度は 30～50%だという。

新型コロナウイルスが気象の影響を受ける可能性は以前から考えられていた。これまでは季節ごとの屋外の気象条件と、ウイルスが病気を起こすパターンとの関連を調べる研究が多く、研究結果はばらばらだった。

これに対し MIT の研究グループは、室内の条件が、感染の動向にどう影響するかを調べた。たいていの国では 90%以上の時間を室内で過ごす人が多く、感染のほとんどが室内で発生するためだ。

今回は、新型コロナウイルスのデータを、121 カ国から取得した気象学的な測定値と組み合わせて検討した。ワクチンが利用可能になる前の 2020 年 1～8 月について、新型コロナの感染者数および死亡者数を集計し、各日のデータをその日の平均室内湿度の推定値と比較した。

室温のガイドラインは、人が快適だと感じる範囲を 19～25℃としている。研究グループはこれに基づき、屋外の気温が 19℃を下回ると暖房が使われて室内の湿度が下がると考えて、室内の相対湿度を推定した。

「室内湿度と感染動向に強い関連」

その結果、屋外の湿度は 1 年を通じて 50%程度だが、室内の相対湿度は、寒い季節に

なると各国で 40%を下回り、同時に新型コロナの感染者や死亡者が急増していた。

また熱帯の国では、屋外でも屋内でも湿度は年間を通じて大差がなかった。それでも夏には、屋外の高い湿度を反映して室内の湿度も緩やかに上がり、60%を超えるとみられた。そして新型コロナによる死者の増えかたは、室内湿度の上がり方を反映していた。

新型コロナによる感染者と死者は、1 年のどの時期であるかにかかわらず、地域の平均的な推定相対湿度が 40%未満か、または 60%を超える時期に多かった。一方、ほとんどの地域で、室内の相対湿度が 40～60%という「ちょうどよい範囲」にある時期には、感染者も死亡者も少なかった。

共同研究者である MIT の Lydia Bourouiba 氏は「我々は当初、この結果に懐疑的だった。新型コロナに関するデータは、ノイズが多くて一貫性を欠くことがあるからだ。だから、この分析については、細かい点もつついて徹底的に検証した。新型コロナに対する政策も屋外の気象条件も、国によって大きく違う。これらを考慮してもなお、室内の相対湿度と新型コロナの感染動向の間には、強くてゆるぎない関連があった」と話す。

なお、室内の湿度が新型コロナウイルスの病原性にこれほどの影響を及ぼす理由は分かっていない。ただ、その後の研究で、湿度が非常に低い場合や高い場合は、ウイルスが飛沫内で長く生き残る可能性が示唆されているという。（HealthDay News 2022 年 11 月 18 日）Copyright © 2022 HealthDay. All rights reserved.